

ガ・ライバル 広重・国芳・三代豊国の共演 東海道五十三対の世界

浮世絵館だより

東海道五十三対は江戸時代後期、弘化元年(一八四四―四七)に制作された浮世絵の揃物(シリーズもの)です。当時の人気浮世絵師である歌川国貞(三代豊国)、歌川国芳、歌川広重の三人が絵を担当し、六軒の版元によって出版されました。

このシリーズは、東海道の五十三の宿場に日本橋と京を入れた五十五枚で一揃いとなっています。宿駅が重複して描かれた図も存在が確認されていますが、基本的には当館の所蔵する五十五枚が一般的に出回っていた「東海道五十三対」であると考えられています。

画面の右上には全ての図に共通して「東海道五十三対」とシリーズのタイトルが書かれています。そして左上のコマには宿駅の名称と詞書が書かれ、画面の三分の二ほどを絵が占めています。詞書の内容と絵の内容が対応している、その宿場に関係のある故事や物語、伝記、風俗などが書かれています。

今回の展示では、人気の絵師たちによる豪華なコラボレーションと、版元たちによる共同制作の姿をご紹介します。



このシリーズのタイトル「東海道五十三対」が全図に共通して入っている。全て黒地に白抜き文字。

改印。これを見ることで何年に出版許可が下りたかがわかる。図によって位置が異なる。

絵師の落款。この場合は歌川国芳。なお、この当時は「歌川」ではなく「一勇斎」という号を用いていた。

「彫工房次郎」とある。彫師の名前。この場所にあるとは限らず、また、必ず入っているわけではないが、このシリーズではよく見かける。

版元によって異なる枠。(詳細は2ページ目)その中に宿駅の名称と、詞書が記されている。詞書の内容は、その土地にちなんだ故事や物語、伝記、風俗が書かれている。

絵師による絵の部分。この枠内で異なる絵師が共作していることはなく、それぞれの絵師が単独で担当している。

版元印。図によって位置が異なる。

歌川国芳「東海道五十三対 日本橋」

藤沢市
藤澤浮世絵館

2021年
6月
WEB版



歌川広重

寛政9年-安政5年(1797-1858) 定火消同心、安藤源右衛門の子として、八代洲河岸の定火消屋敷に生まれる。

文化8年(1811)頃に初代歌川豊国に入門を希望するが断られ、歌川豊広に入門となった。



歌川広重「東海道五十三対 平塚」

▲稲毛三郎重成(?-1205)と馬入川(現在の相模川)が描かれている。重成は妻の追善のために橋供養を営んだ。その際に雷が落ちて、血縁の関係により出席していた源頼朝の馬が驚いて川に入り亡くなった。そのためこの川は馬入川と名づけられた、とある。

歌川国芳

寛政9年-文久元年(1797-1861) 京紺屋、柳屋吉右衛門の子として、江戸日本橋本銀町一丁目に生まれる。文化5年(1808)鐘馗の図を描き、その画才が初代歌川豊国に認められる。正式に入門したのは文化10年頃か。



歌川国芳「東海道五十三対 川崎」

▲敵に謀られたために、多摩川の矢口渡で船を沈められ最期を迎えた新田善興(1331-58)が描かれている。計画に関わった人々は江戸に帰る道中に報いがきたことから、靈魂を鎮めるために新田大明神として奉った、とある。

歌川国貞(三代豊国)

天明6年-元治元年(1786-1864) 渡船場の株を持つ材木問屋、亀田屋庄兵衛の子として江戸本所伍ツ目に生まれる。

享和元年(1801)頃に初代歌川豊国に入門。



歌川国貞(三代豊国)「東海道五十三対 神奈川の驛 浦島」

▲詞書には神奈川に縁のある浦島伝説のことが書かれている。釣りをする女性と一見関係のないように見えるが、女性の着物の紋りと手ぬぐいに亀の模様がみられ、亀と関連のある浦島太郎を彷彿させる図になっていることがわかる。

三人の 絵師

国貞(三代豊国)、国芳、広重は嘉永六年(一八五三)に出版された『江戸寿那古細撰記』という番付の「錦絵」の項目に「豊国にかほ」「国芳むしや」「広重めいしよ」と並んで記されています。これは似顔絵(役者の似顔絵)、武者絵、名所絵でそれぞれ高い評価を得ていたことを指しています。

「にかほ」「むしや」「めいしよ」とは

むしや (武者絵)



歌川国芳「義経之軍兵一ノ谷逆落し之圖」天保元-13年(1830-42)

武者絵とは、歴史上の英雄や豪傑、合戦の場面、武将に関連する故事説話などを指します。文学に描かれた想像上の武者を描いた稗史絵も含まれることがあります。

成立自体は浮世絵の初期まで遡りますが、国芳の『水滸伝』の豪傑を描いたシリーズによって人気となります。

にかほ (似顔絵)



歌川国貞(三代豊国)「東海道五十三次之内 大磯 十郎祐成」嘉永5年(1852)

似顔絵とは浮世絵では役者の似顔絵のことを指します。役者の顔を写實的に、かつ誰かわかるように描いたものです。

浮世絵錦絵の初期からずっと人気のジャンルでしたが、天保の改革によって一時出版が禁止されました。

めいしよ (名所絵)



歌川広重「東海道五拾三次 藤沢」天保11年(1840)頃

現在は風景画と称されることも多いですが、江戸時代当時は名所絵と呼ばれていました。その名のおり名所を描いています。

名所絵が人気ジャンルとして確立したのは天保期(1830-44)の頃です。葛飾北斎の「富嶽三十六景」シリーズがきっかけとなり、広重の「東海道五拾三次」でその地位を確立しました。

六軒の版元

先に触れたように、この揃物は六軒の版元による共同での出版というのも特徴の一つとなっています。

六軒の版元とは伊場屋仙三郎、遠州屋又兵衛、伊場屋久兵衛、海老屋林之助、小嶋屋重兵衛、伊勢屋市兵衛(各版元の略称は下部参照)です。それぞれ、制作数は十六図、十一図、十一図、六図、七図、八図となっており、ほとんどが団扇絵の版元であったことが判明しています。

この中でも、伊場仙については制作枚数が最も多いことや最初の「日本橋」を担当していることから、企画の中心であったと考えられています。

天保の改革(一八四一—一八四三)によって、それまで団扇に仕立てられた製品しか販売できなかった団扇絵の版元は、錦絵を販売できるようになりました。そのタイミングで有名な絵師三人を迎えて、六軒の版元が共同で出版したということはある程度の需要を見込んでいる出版であったことを伺わせます。



伊場屋仙三郎

いばやせんざぶろう

略称：伊場仙



遠州屋又兵衛

えんしゅうやまたべえ

略称：遠又



伊場屋久兵衛

いばやきゅうべえ

略称：伊場久



海老屋林之助

えびやりんのすけ

略称：海老林



小嶋屋重兵衛

こじまやじゅうべえ

略称：小嶋



伊勢屋市兵衛

いせやいちべえ

略称：伊勢市

大坂版「東海道五十三対」

※当時の表記に倣い「大坂」としてあります

(江戸)



歌川広重「東海道五十三対 京」

(大坂)



歌川貞広「東海道五十三対 三條はし」

「東海道五十三対」は江戸で出版された揃物ですが、こちらの大坂版というものも存在しています。「大坂版五十三対」とも呼ばれていて、嘉永四年(一八五二)に天満屋喜兵衛という版元から出版されました。江戸版は大判でしたが、こちらは画帖仕立て用に摺られたと思われる中判サイズ(大判の半分の大きさ)で、更にそこから半丁ずつ一つの宿場を割り当てているため、一図の大きさは江戸版から四分の一程度になっています。判型の変化に伴って画面のコマの割合が変わり、絵も描き直されています。絵師は歌川貞広と歌川貞芳。二人とも大坂で活動していた浮世絵師で、国貞(三代豊国)の画系とされています。

大坂版は江戸版の五十三対とほとんど同じ構図と内容で描かれています。画面の右上のコマはシリーズ名から宿駅名に、左上にあるコマ部分の詞書は江戸版のものから略されたものになっているのがほとんどです。画面の配分としては絵の割合が多くなっており、絵のコマがシリーズ名や詞書のあるコマにまで被っています。

江戸版と大きく異なるのは「京」の図で、江戸版の「京」は大坂版では「三條はし」になっており、大坂版の「京」には新たに別の図が追加されています。この大坂版が出版されたという事実は、元となっている江戸版の五十三対が人々に広く受け入れられ、楽しまれていた可能性を示しています。

(江戸)



歌川国芳「東海道五十三対 藤沢」

(大坂)



歌川貞広「東海道五十三対 藤沢」

大坂版「三條はし」の詞書は、江戸版からの短縮はみられない。

大坂版「藤沢」の詞書は江戸版から短縮されている。また、明らかに人物の拡大(あるいは他の事物の縮小)がある。

江の島と鎌倉 近代のたてもの

「江の島コーナー」では近代になって流行した銅版画や石版画に描かれた江の島と鎌倉の風景を、江戸時代の浮世絵と比較して展示しています。表現の違いや描かれているものの違いにもご注目ください。今回はその中からかつて辻堂で見られた光景を紹介します。

「明治館」そのものは開業間もなくして閉業となつてしまつたようですが、風光明媚な景色を偲ばせま

画中の句は、江の島「恵比寿屋」の主人で俳人でもあつた永野泉山によるものです。

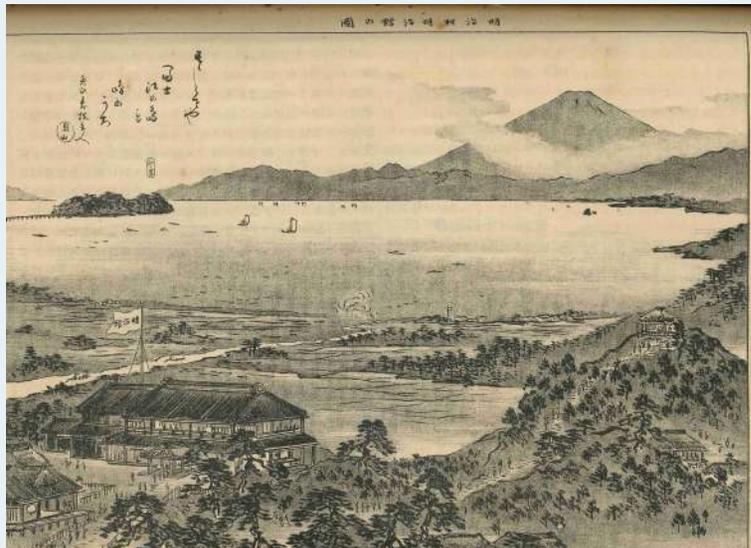
明治村とは明治二三年(一八九〇)に現在の藤沢市内「羽鳥」「大庭」「辻堂」「稲荷」が合併してできた村で、明治館は藤澤浮世絵館の最寄り駅である辻堂駅の南のあたりにあつたとい

「明治館」そのものは開業間もなくして閉業となつてしまつたようですが、風光明媚な景色を偲ばせま

画中の句は、江の島「恵比寿屋」の主人で俳人でもあつた永野泉山によるものです。

▼かつての辻堂駅の南側▼

※辻堂駅は藤澤浮世絵館の最寄り駅です



山本松谷 風俗画報 臨時増刊171号「明治村明治館の圖」明治31年(1898)



山本松谷 風俗画報「恵比寿屋全景並二同樓旭の間の圖」明治31年(1899)

恵比寿屋は現在も江の島島内に所在する老舗旅館です。こちらは明治時代の恵比寿屋から江の島を望む図。

とうかいどうごじゅうさんつい かい 正体見たり！東海道五十三對の怪異

図の女性の着物には、共に三角形が連続する模様が描かれています。両画面の説明にあたる詞書を読まなくても、この女性の描き方を見れば龍女であると分かります。手がかりになるのは、着物の模様です。両

東海道五十三對のシリーズには、いくつか幽霊や妖怪が描かれたものがあります。その一例として龍女が描かれた、二図を紹介します。

歌川国芳による図一では短冊(人物の横に描かれている名札)に龍女であることを明記された女性が水面に立ち、俵藤太にムカデ退治を依頼する場面が描かれています。女性の立つ水面下には鱗を纏った蛇体の長い影が伸びています。一目で女性性が人間でないとわかる描写です。

一方、歌川国貞(三代豊国)による図二では、眠っている法然上人の前になにやら怪しげな女性が立つ姿が描かれています。一見、人間のように見えますが、実は図2も女性は龍女として描かれています。画面の説明にあたる詞書を読まなくても、この女性の描き方を見れば龍女であると分かります。手がかりになるのは、着物の模様です。両



「東海道五十三對 草津」
着物 拡大図



図一 歌川国芳「東海道五十三對 草津」



図2 歌川国貞(三代豊国)「東海道五十三對 袋井」

龍女：元は「法華經」の説話に登場する竜王の娘のことを指します。しかし、龍が女性に化けた姿の名称としても用いられます。

これは蛇や龍の鱗に似た形状から「鱗文様」と呼ばれ、正体が蛇や龍である人物を表す着物の模様です。鱗文様は、能楽でも正体が蛇や龍の化身の衣装に用いられます。本図が描かれた江戸時代では、鱗文様が蛇や龍を表すという事は周知の事実であったのでしよう。

浮世絵には直接的な表現のみではなく、着物の模様や小道具など様々な物を配することで暗示をする、間接的な表現が多くあります。幽霊や妖怪の図もこうした表現を用いて描くことのある作品の一例です。絵師の描いた手がかりを元に、描かれた人物の正体を考えてみるのも浮世絵鑑賞の楽しみです。



「東海道五十三對 袋井」
着物 拡大図